

れる社会の中心と周縁のテーマに深く関わってくる。人間は、しばしば岩などにやどる「下のバブ」(第8章)のもとへと赴き、力(トア)あるいは財をさずかることがある。そのような人間はトア・マリとして一種の呪医のような役割を社会の中で果たす。悪の社会の外側の代表が「上のバブ」であるとするれば、社会の内側の悪の代表は、妖術師(ポロ)であろう。トア・マリはポロの攻撃(しばしば病の形をとる)を防ぐことができるのである。しかし、トア・マリはしばしば一般の人々に疑惑の目をもってみられる。トア・マリの所行はあまりにポロに似ているのだ。かくして、トア・マリを社会の周縁の力・財の所有者と言うならば、社会の中心の力・財の所有者としてモサラキ(「高い位階の人物」)について語るができるだろう。彼らの力・財の獲得方法は、(トア・マリの個人的で秘密に満ちた、岩での瞑想と対照をなす)集団的なそして公のものである。その方法のうち、最も重要なものがパ・セセ儀礼なのである。

(結論をのぞいた)最後の章(第14章 Buffalo sacrificing in the constitution of Nage cosmology and society)は一章すべてが、この儀礼の記述・分析に割かれている。パ・セセ儀礼こそが、社会の中心に位置するモサラキの「正当な」力の源泉なのである。

パ・セセ儀礼は、二重の意味で、供犠の通常理論、すなわち、犠牲獣は人間の代替物であるという理論と相違する。第一に、供犠に付される水牛は、人間の代わりではなく、あくまで水牛(=バブ)だということである。そして、水牛は、「バブの代わりとして」殺されるのではなく、「バブとして」殺されるのである。

著者は、その複雑なロジックをつぎのようにまとめる。人間は(人間の社会の内において)水牛を飼っている。人間が水牛に対するのと同じような関係を、(社会の外において)人間に対して持っている何者かがいるだろう。それがバブ(「上のバブ」)なのだ。すなわち、バブ:人間::人間:水牛という関係が成立する。この関係の中において、人間(たとえば、コッディ・テキ)は(バブ、たとえば、ウォンガ・ウェア、に対して)水牛のようなものとなるのだ。さらに、「互酬的な逆転」(reciprocal

inversion)(第15章)と著者の呼ぶ変形操作によって、人間:水牛::水牛:人間という図式が成立する。かくして、バブ(たとえば、ウォンガ・ウェア)は、人間にとって水牛のようなものと見なされるようになるのだ。

たしかに、多くの読者にとって、本書は1990年代末に書かれたモノグラフというより、70年代・80年代前半の民族誌のように思えるかも知れない。90年代の諸理論への言及はともかく、それら様々な理論が活用できるような形でデータが提出されていないのは、大きな問題である。たとえば、これらの知識の社会内での配分、知識のじっさいの運用、等々の記述はほとんど見当たらない。しかしながら、ここにある情報量を維持しながら、さらにいま述べたようなデータを記載することは、膨大な民族誌を書くことを意味するだろう。私は、本書のような記述方法も、ひとつの便宜として認めたい。本書の続編が、社会学的な記述に満ちた続編が書かれるならば、二部作の(あるいはもしかしたら三部作の)民族誌として、たいへんに優れたモノグラフとなるであろうと評者は期待している。

(中川 敏・大阪大学大学院人間科学研究科)

Eleanor Mannikka. *Angkor Wat, Time Space and Kingship*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 1996; St. Leonards, Australia: Allen & Unwin, 1997, 341p.

I アンコール研究史

アンコール・ワットは、ヴィシュヌ神を信奉する寺院として12世紀の初期、スールヤヴァルマン二世(1113~1150年頃)により建造された。規模は南北約1,300m、東西約1,500m、総面積は200haに及ぶ大伽藍である。アンコール・ワットの建築形態は古代インドの宇宙観であるメール山(須弥山)の具象化とされる。

1860年にカンボジアを訪問したHenri Mouhotによる旅行記はアンコールの名を世界的に広める契機となる。その後の19世紀後期にはアンコールに関する様々な学術的資料が報告されるに至る。次第にア

ンコール研究は体系化され、歴史的な位置付けが学術的側面より明るみになる。その過程においてアンコール・ワットは現在見られる様に、アンコール遺跡全体、ひいてはクメール文明の栄華を表す寺院として位置付けられる。この様な背景には、アンコール・ワットが近現代のカンボジアにおけるナショナリズムの象徴として政治的に利用された点も指摘されているが、¹⁾ いずれにせよクメール文化遺産研究の中においてアンコール・ワットは最もプライオリティーの高い研究課題であった。

1908年にアンコール保存事務所が開設されると、同年11月よりアンコール・ワットを嚆矢として保存活動（当時の保存活動は専ら樹木の伐採、堆積土の除去、崩壊石材の除去作業などが主なもの）が開始される。1920年代には Philippe Stern の図像学研究²⁾ や George Coedes による碑刻文研究³⁾ によりバイヨンの建築年代が Jayavarman VII世（1181年登位）の治世に建立された事が決定付けられた他、バンテアイ・スレイ、バプオンなど主要寺院の建立年代が G. Coedes の碑刻文研究により次々に明らかにされる。第二次大戦後1950年代には、Madeleine Giteau による図像解析により、アンコール・ワットの浮き彫りの意味解釈が行われる。1960年代の初頭、Bernard Philippe Groslier のもと、数多くの遺跡の修復事業が行われると共に主要な遺跡に関する詳細な建築図面集が製作される。とりわけ2年間を費やして行われた Guy Nafilyan によるアンコール・ワットの実測調査は、1969年、113枚の図面集として出版される。⁴⁾ この図面集は縮尺50分の1を主要な縮尺とした非常に精度の高い図面で、Mannikkaもその著書の中で「この図面集が無ければ自らの研究は成就しなかった」と記述する。

70年代より現代にかけては、クメール建築計画に関する研究も進展し、Rene Dumont がアンコール・ワットに用いられている「建築プロポジション

の法則」を幾何学的側面よりの解明を試みる。⁵⁾ 他方、Tatinana Proskouriakova は、「黄金分割比（1:0.618…または1.618…:1）」を幾何学研究に応用し、アンコールに所在する広範な遺跡の配置計画・平面計画・彫像寸法の中には「黄金分割比」が適用されていたと説く。⁶⁾ また、Bruno Dagens によりインド建築書 *Mayamata*⁷⁾ がフランス語に翻訳され、インド古典建築における建築計画法の一部が紹介され、インド建築書を比較資料としてクメール建築計画を研究するアプローチに道を開く。

この様にアンコール・ワットに関する既往研究は、19世紀中葉のアンコール訪問者、探検家による見聞記を経て、19世紀後期よりの学問としての研究領域を確立、歴史学・建築学・考古学・様式論・図像学など、近代に輩出された方法論を用いた研究が進む。また「クメール史の歴史的な位置付け」「クメール建築・美術の様式の確立」「寺院建立年代の序列・編年化」などこれら未確立領域であったクメール史の根幹を為す分野の構築が行われ、現在見られる通史の完成をみる。ただしそこには19世紀にヨーロッパ建築・美術史を席捲していた「様式論」でカンボジア史を解釈、確立しようとした時流が読み取れることも否めない。第二次大戦終焉後、70年代までのアンコール・ワット研究は新局面を迎え、近代の学問である歴史学・建築学・美学研究により解明された論旨に立脚しつつも新たな方法論・視点での解明が試みられる。

II Mannikka によるアンコール研究

本書は、アンコール・ワットの建築計画に隠された天文学、哲学的、宗教的原理を解明・誘導した、上述の既存研究手法とは趣を異にする新味な論考である。また同論考ではアジアの説話を題材とした浮彫りの中に天文学的要素を見出した他、アンコー

1) Milton Osborne. 1966. *History and Kingship in Contemporary Cambodia*. など。
 2) Philippe Stern. 1927. *Le Bayon d'Angkor Tom et l'évolution de l'art khmer*.
 3) George Coedes. 1928. *Etude Cambodgiennes: 19. La date du Bayon*.
 4) Guy Nafilyan. 1969. *Angkor Vat, Description Graphique du Temple*. Paris: EFEO.

5) Rene Dumont. 1996. *Angkor Vat par la règle et le compas, Penindule*.
 6) Tatinana Proskouriakova. 1998-1999. *Theoretical Study of the Architecture of the Angkor Monuments*.
 7) Bruno Dagens. *Mayamata, Traite sanscrit d'Architecture*. 1er Partie: 1970, 2em Partie: 1976.

ル・ワットを設計した建築家が、建築からサンスクリット詩、天文学、そして宗教行事まで全ての事に精通していたとする。女史がこの研究に着手した70年代初頭は、クメール建築の論壇中において太陽や月の軌道がアンコール・ワットの寸法計画に組み込まれているという議論は無かったとする。

これらの成果は、まず雑誌 *Science* の76年7月号に発表される (*Astronomy and Cosmology at Angkor Wat, Science Vol. 193 July 1976*)。この時に発表された論文は、今回、出版された書籍の骨幹を成すといえる。また著者と共に、天文学と自然科学の大学院生が連名で論文を発表しており、美術史専攻の著者の思考に、天文学、自然科学のコンセプトが学際的に発揮され、このような発想が誕生したことが窺え興味深い。本書の目的はアンコール・ワットの建築的な栄華について探求するだけでなく、日進月歩ですすむ建築史研究に新しい分析手法を提示することでもあった。天文学、歴史、宇宙観、そして政治が部分的、連帯的そして全体的に建造物の建築計画・構造形式・規模を決定する要因であることを明らかにした点は注目に値する。

第1章は、建築材料、12世紀のアンコール都城、本書に用いられた寸法分析に関する方法論など、基礎的情報について言及されている。その他、第1章では「デヴァラージャ (Devaraja) 思想」(神王思想) について説明した上で、それが如何に機能したかを示唆する。第2章は、「西参道」を構成する建築的・数的コンセプトについて言及する。環濠の両端を繋ぐ「西参道」は、「王とヴィシュヌ」「神そして神に敵対する神々」「地球の軸と春分」「王の戴冠とアンコール・ワットの始まり」など二つの相互に対峙する事象を繋ぐものであるとする二元論的な観念を提示する。第3章は引き続き寺院の中に見られる建築的・数的解釈についてであり、アンコール・ワットに隠された暦や宇宙観などに関する数理を説明している。時を計る為の星宿や星座は、それ自体が魅力的なだけでなく、アンコール・ワットの象徴的意義の根幹をなすとする。第4, 7, 8章は、長い参道から中央ギャラリーを抜け中央塔までの寸法システムについての論考であり、第5, 6章では、第1回廊の浮彫りについて言及する。結章としての第9章では、ヴィシュヌ神と王との関係等、いくつ

かの視点より寺院全体を概観する。

通常、クメール寺院は東を正面とするが、アンコール・ワットはその逆の西を正面とする。同点に関する言説はアンコール・ワット研究の主題の一つでもあり、今までに数多くの解釈が提示されてきた：①アンコール・ワットはスールヤヴァルマン二世の墳墓であり、西の方角は「陽の沈む方角」、つまり「死後の世界の方角」を示す、②アンコール・ワットに奉られていたヴィシュヌ神は、インドの神であり、カンボジアから西のインドの方角をさす、③クメール寺院建築は「水」(つまり貯水池)と一対の関係にあり、アンコール・ワットは対とする貯水池を西バライに想定している、④地形的条件による、など……。現段階では Coedes が提唱した①「アンコール・ワット墳墓説」が広く一般に受容されている。

Mannikkaは、アンコール・ワット西参道入り口を基点として、夏至の日、太陽はアンコール・ワットの北東、17.4 km に位置するブノン・ボックの方角より日出し、他方、冬至の日には、アンコール・ワットより南東、5.5 km に位置するブラサット・コック・バングロの方角より日出する点を例に挙げ、アンコール・ワットの建築計画への太陽軌道の導入の結果、アンコール・ワットは西を向くという新説を説く。

天文学の視座でアンコール・ワットの建築計画を論考する Mannikka の試みは、先行研究には無い斬新な研究手法であるといえる。女史が着目した「天文学と建築計画」との関連は、アメリカ中部のインカ・マヤ文明による建造物が天体の運行と密接に結びついた建築計画を持つ点に着目し、同手法を用いてアンコール・ワットを分析した所産である。しかしながらここでの疑問点は、前掲の R. Dumont の幾何学的解釈、⁸⁾ T. Proskouriakova の黄金分割比⁹⁾と同じく、Mannikka による天文学と建築との関連性に関する研究も、ヨーロッパ、アメリカの研究者が他文明の建築研究で実績を得た研究手法をク

8) 方法論の発想は、19世紀中葉、フランスで活躍した Viollet-le Duc による中世教会建築の幾何学的解釈を準用。

9) 同じく、ギリシャ、ローマ建築の計画寸法研究に用いられた手法を準用。

メール建築に準用した点である。本来のクメールの建築家・技師・工人が用いた建築計画をそれらの論著が的確に指し示しているかどうかは今後、他の遺跡での多くの検証が必要となる。しかしながら Mannikka による研究手法は、正確な実測を基に作成された図面、実測数値無しには分析不可能であり、アンコール・ワットで指摘された天文学に基づく寸法計画が、他のクメール建築にも用いられたかどうかの検証は、未だ試みられていないのが現状である。

また JSA（日本国政府アンコール遺跡修復チーム）によって現在行われているアンコール・ワット北経蔵の解体修理前調査では、経蔵身廊の柱径（484.92 mm）を一単位長とし、経蔵の計画寸法がなされた点が指摘されており、アンコール・ワット全体の建築計画にも 484.92 mm を一単位とする長さが用いられたとする。¹⁰⁾ Mannikka による研究は、435.45 mm を一単位長とし「尺度」に関する論考を展開する。ここでは両者どちらの単位長がアンコール・ワットの建築計画に用いられているかの言及は避けるが、Mannikka が用いた一単位長（435.45 mm）が全く違ったものであれば、女史の論考の過半を占める「尺度」に関する論考は灰燼と帰す可能性のあることを指摘しておく。

その上、Mannikka はこの 435.45 mm を一単位長として天文学、インドの数理、暦法などをもとにアンコール・ワットの建築計画（建物配置、規模など）が求められているとする。しかし他説として、R. Dumont は一単位長を基準として、直線、方形、円などの図解と平方根（ $\sqrt{\quad}$ ）などを援用する事により求められているとし、¹¹⁾ JSA は一単位長を基準とした基盤目の規格線の上で建築計画がなされている、¹²⁾ など全く違った建築計画を提示する論考がみられる。アンコール・ワットの建設に際して、古代クメール人が用いた建築計画は、方向性の違う数通りの遣り方が同時に施行された訳ではなからう。こ

の点は今後課題を残す点でもある。

一般に建築計画研究では、実存遺構を精密に実測した成果と、それを解き明かす当時の「図面」や「建築書」の解読という両者が同時平行的に進捗する。「建築書」として、ヨーロッパでは前1世紀の古代ローマ建築家、Marcus Vitruvius Pollio によって書かれた *De architectura libri decem* 『ウィトルウィウス建築書』が著名で、ルネッサンス建築家が古典建築を研究する際に重用した。日本においては、1608年、平内政信によって記された「匠明」などが一般的に知られ、近世に入り「規矩術」という形で大成、「雛形本」として江戸中期には一般に流布する。建築計画研究では、これら「建築書」に盛り込まれた寸法計画、部材の断面などの算出術を実存遺構に照らし合わせる作業が通常行われてきた。

クメール建築の場合、この「建築書」に該当する書物は、存在したかも知れないが現存するものではなく、各研究者が実存遺構をもとに手探りで「建築の法則」を見出そうとしているのが現状である。建築計画研究の重要性は、ただ単にその当時の建築法則を見出すものではなく、その当時の社会的背景までも浮き出させる点である。アンコール・ワットの建築計画には天文学、哲学的、宗教的原理が根底に用いられ、その当時の王権、神権、そしてそれを取り巻く環境の具象化がアンコール・ワット他ならぬことを Mannikka はその著書の中で知らしめた。本書はその重要性をいち早く指摘し、20年に及び分析・検証、明らかにした労作であるといえる。

（荒樋久雄・上智大学アジア文化研究所）

Khin Maung Kyi et al. *Economic Development of Burma: A Vision and a Strategy*. Stockholm: The Olof Palme International Center, 2000, 233p.

本書はビルマ人経済学者が共同執筆したもので、構成は以下の通りである。第1章：序論、第2章：展望と政策の枠組み、第3章：農業、第4章：製造業、第5章：天然資源と環境、第6章：国際貿易と投資、第7章：マクロ経済安定のための金融・財政の枠組み、第8章：貧困と所得分配、第9章：教

10) 土屋武；中川武。「アンコール・ワットの寸法計画について——クメール建築の設計方法に関する研究（IV-1）」『1999年日本建築学会大会学術講演梗概集』。

11) 注5) 参照。

12) 注10) 参照。